プロジェクト共同研究組織中間報告（2006年度）

アメリカの社会と文化に関する総合的研究

A Comprehensive Study of American Society and Culture

総括研究員名：宮田 実
分担研究員名：樋口 忠成、神崎 ゆかり

(1) 研究の目的と意義

アメリカの多文化主義の現状と成果および課題を、様々な分野から専門的な視点で分析し評価する必要があるのは当然だが、更にそれぞれの専門分野を超えて総合し、より多角的に検討することが重要である。このプロジェクト研究ではできるだけ広範囲な専門分野から得たアメリカ社会に対する知見や課題を、議論を通して共同研究の形で肉付けする意義を持つ。

(2) 総合研究として実施することの必要性

このプロジェクト共同研究に参加している研究者は、文学という視点から、高等教育という視点から、また都市という視点から、それぞれアメリカの社会と文化を研究してきた。しかしアメリカ社会の動向はこうした個別的視点からの分析では限界があり、総合することによって全体像を見極め、多角的な観点から考察することによって、より広い視野からアメリカの社会と文化を捉えることができる。

(3) 2006年度（初年度）の活動報告

① 第１回研究会（2006年６月６日）

３名の研究員による初会合。これまで各自が単独で研究してきた内容の紹介。アメリカの多文化主義の現状と成果および課題を分析するに当たり、それぞれの研究がどのように貢献できるかについてのディスカッション。

② 第２回研究会（2006年10月４日）

今回より研究協力者の矢嶋　巌氏（本学非常勤講師、地理学）が参加。宮田研究員による『高等教育クロニクル』の記事（アメリカの大学における２年生支援プログラム）の紹介とディスカッション。

③ 第３回研究会（2006年11月29日）

樋口研究員による研究発表（デンバー大都市圏の郊外化と都市構造の変化）およびディスカッション。

④ 第４回研究会（2007年１月17日）

神崎研究員による研究発表（ゴシック小説の変遷とアメリカン・ゴシック）およびディスカッション。

⑤ 第５回研究会（2007年２月26日）

矢嶋研究協力者による研究発表（ハワイ オアフ島における水道の展開）およびディスカッション。

アメリカ高等教育の特質

宮田 実（教養部）

アメリカで発行されている高等教育に関する週刊専門紙『高等教育クロニクル』の記事の翻訳を通して、アメリカの高等教育の特質の研究を進めている。これまで４つの記事を翻訳し、大阪産業大学論集に発表した。

最初の記事は、2005年２月４日号の「アメリカの大学新入生に対する実態調査」（大阪産業大学論集　人文科学編118）である。この調査はＵＣＬＡが毎年、約30万人の大学新入生に実施している大規模なものである。今回のアンケート結果の特徴として、経済的に苦しい学生の増加、政治観の分極化、広がるデジタル・ディバイドなどが挙げられている。

次に取り上げた記事は、2005年11月18日号の「アメリカの大学への留学生２年連続減少」（大阪産業大学論集　人文科学編119）である。2003－4年度に1971年以来初めて留学生が2.4％減少し、2004－5年度には1.3％減少した。しかしながら、アメリカは依然世界最大の留学生受入れ国である。ピーク時の2002－3年度で586,323人の留学生を受け入れている。アメリカへの留学生送り出し国上位４カ国は、インド、中国、韓国、日本の順である。留学生数を更に増やしたいアメリカにとって、今後の留学生数の動向は気になるところである。

３つ目の記事は、2006年９月８日号の「アメリカの大学における２年生支援プログラム」（大阪産業大学論集　人文科学編121）である。アメリカの大学ではかつては学生数が減っていくことが大学の威厳を示すものであったが、そのような大学におけるダーウィニズムは過去のものになった。今や学生を大学に留まらせることが重要な課題になっている。１年生に対しては、大学生活に適応できるように様々なプログラムが実施されているが、２年生に対する大学の支援はそれほどでもなかった。しかし、最近「２年生スランプ」に陥った学生に対する支援をする大学が増えてきた。そして、いくつかの大学ではその効果が出始めているようだ。

４つ目の記事は、2006年11月24日号の「アメリカの大学：40年の変遷」（大阪産業大学論集人文科学編122）である。『高等教育クロニクル』の創刊40周年を記念して特集された記事である。この40年間で変わった主な点として、増え続ける学生数に応じて増加した大学、学生の構成比の変化、公立と私立に在籍する学生の比率の変化、国際化した大学などが挙げられている。アメリカの大学はこの40年間で大きく成長した。しかし、成長と同時に多くの問題点も浮かび上がってきた。

アメリカのゴシック小説

神崎 ゆかり（人間環境学部）

18世紀にイギリスで生まれたゴシック小説は、20世紀に至るまで反主流の文学作品とみなされていた。しかし、このジャンルはアメリカでは主流の文学作品に受け継がれることになる。アメリカという国家の精神風土にうまく合致したといわれている。

アメリカ独自のゴシック小説を確立したとみなされているのは、チャールズ・ブロックデン・ブラウンである。彼は荒野や洞窟といったアメリカ的な風景や先住民の問題を導入しただけではなく、理想国家を目指すアメリカが建国当初から内包していた矛盾に着目することによって、イギリスのゴシックをアメリカ独自のものに変えた。そして恐怖の対象を、外在する何かではなく、人間の内部に巣くうものとして心理的ゴシックへの道を開いたのである。このことを、作家として自ら明言したのはエドガー・アラン・ポーである。彼は、ゴシック小説の「探求はたんに思わせぶりな謎の解決にあるのではなく、神秘的な人間の内奥へ向かっていく」と主張した。それ以降、ナサニエル・ホーソーン、ハーマン・メルヴィル、ヘンリー・ジェイムズ、ウイリアム・フォークナーなどアメリカを代表する作家たちがアメリカのゴシック小説をさらに充実させることになった。

そこで平成18年度は、イギリスとアメリカのゴシック小説を比較し、現代に至るまでのアメリカのゴシック小説（アメリカン・ゴシック）を概観したあと、その系譜に位置づけられる20世紀の女流作家ジョイス・キャロル・オーツの作品を取り上げた。オーツは、自らの経験をもとに書いた小説『かれら』（*Them*）で名をあげ、小説だけでなく劇、詩、評論などの分野で現在も幅広く活躍している作家である。彼女の数多い作品のうち、60年代のアメリカ郊外都市を舞台にした短編「どこへ行くの、どこに行っていたの」（“Where Are You Going, Where Have You Been?”）は、一見ゴシック小説ではないように思われるが、主人公の内的「他者」の化身を悪魔的人物に仕立て上げたゴシック小説である。同時に、この作品は60年代当時のアメリカ社会の問題をも映し出している。そこで、この作品のアメリカン・ゴシック性について分析した。次年度はオーツの研究をさらに深める予定である。

平成18年度の研究結果は、プロジェクトの研究会（平成18年６月）で議論した後、『人間環境論集』（平成19年６月発行）に発表した。

アメリカ都市の衰退と再生

樋口 忠成（教養部）

アメリカ都市は都市住民の移動の手段として自動車が導入されてから大きく変化した。1920年代に自動車が普及するとともに郊外型のショッピングセンターが登場し、自動車を移動の手段とした郊外住宅の建設が始まった。第二次世界大戦後の結婚ブームとベビーブームによって住宅が大量に建設されることになったが、モータリゼーションの一層の進展とともに都市は郊外に拡大していった。1950年代以降の高速道路の建設は郊外化をさらに押し進め、都心から遠く離れた地域に住宅や商店が進出していった。

都市住民は自動車を中心的な交通手段として使うことによって、多少都心から離れていても広い上質な住宅地を手に入れることができるようになった。広い敷地に緑の芝生、明るいキッチンを持つ、ゆったりとした住宅、緑の木々が木陰を作る快適な散歩道。そしてそうした住環境は郊外の厳格な用途地域指定（ゾーニング）によって守られた。そんな理想的な郊外住宅を手に入れることが多くの人にとってもっとも身近なアメリカンドリームとなったのである。

ただ無秩序に進む郊外の開発によって、都市住民は都心からますます離れて居住することになった。低密度に住宅開発が進んだために公共交通が発達せず、私的交通手段としての自動車への依存がますます高まったため、都心は都市住民にとって交通渋滞を覚悟しながら時間をかけて行かねばならない場所になっていった。1970年代頃から商業の中心としての都心、さらに雇用の中心としての都心は徐々に衰退し始める。スーパーなどの日常的な購買活動を支える小売業はもちろん、高次な小売業もショッピングセンターの建設という形で郊外に進出し、オフィスなども次第に都心を離れて郊外に流出するようになる。1980年代になると、ニューヨークやシカゴなど巨大都市を例外として、多くの大都市で中心部のデパートが姿を消すことになった。それに続いてオフィスまでも郊外に流出し始めて、都心の衰退が顕著になってきたのである。

現代のアメリカ都市の課題は、衰退した都心の再生にあり、プロジェクト研究の研究課題もここにあるが、2006年度はアメリカ都市の郊外化の基本的なデータを収集すること、郊外化を中心に小売業の立地動向を把握することを中心に、研究を遂行してきた。研究成果の一部は人文地理学会都市圏部会での研究発表（2006年12月）に含まれている。